文芸プラザ

短編小説

確執の果て（下）

今井　隆

「これからどうなるのかなぁ」と、米子が言ったので私はすぐに、「何がや」と聞きました。米子は、ふっと微かに笑みを浮かべて、「私たちのこと……」と言いました。私は米子の心境に何らかの変化が起きたのではないかと心配になって、私の中にどくどくと血の流れる音を聞いたのです。

どう応えたら良いのか情けないことに私には分かりませんでした。考えあぐねていた私にしていた米子は、先ほどよりは快活に笑って「考えても仕方がないですか。流れに任せましょうか」と言いました

母が料理を運んできたので、米子は椅子から立ち上がり、母が「いいから座っていて下さい」というのを軽く受け流して皿を並べるのを手伝いました。私はその光景を見て妙な気分になりました。というのは、まるで嫁と姑の関係が長いかのような自然な感じがしたからでした。

何事もなかったかのように、私たちは食事を食べ始め、米子が「こも豆腐」の作り方とか味付けの方法についていろいろと聞いたので、私は先ほどのことは何だったんだろう、という気持ちになりました。時間は米子のテンポのよい会話とともに、あっという間に過ぎていきました。

私は米子を送っていくことにしました。母は車庫までついてきて、何時買ったのかカステラらしき手土産を持たせました。米子は恐縮そうな顔をして受け取っていました。

私は米子に「どうだった」とだけ聞き、心の中で（母は）と呟きました。米子は、母のことには触れなくて、庭で見た雀は今頃どこを飛んでいるのでしょうとか、雀は何を尺度にして夫婦になるんでしょう、などと下らない話ばかりしていました。

米子の家に着いて車を降りる時に、「結婚の話は、出発点まで戻ってもう一度考えた方がいいんじゃないでしょうか」と事もなげに言ったのです。

私は驚いて、直ぐには次の言葉が見つかりませんでしたが、降りようとしている米子の手首を掴んでようやく「どういうこと」と聞きました。米子は、一瞬顔の表情をこわばらせたように見えましたが、「少し考えたいの」と静かに言いました。

私の手に米子の肌の熱が伝わってきました。私はふと、米子を抱いている姿を想像しました。こんな時になぜそのようなことを考えたのか、未だに分からないのですが、そんな想像をした途端に、私は握っていた手を緩めました。米子は、私の顔を一瞬見ましたが、「手紙を書きます」と言い残し、後ろも振り返らずに家に入っていきました。

ふがいないことに私は、米子の家の前でハンドルを握ったまま、五六分ぐらいの時間だったでしょうか、そのままじっとしていました。米子はどんな結論を出すのだろうか、ということだけが頭の中を回っていましたが、私は家路につくことにしました。

家に帰ってくると、母は服を野良着に変えていて、庇の下に立てられた脚立に登って、手には金槌を持っていました。私の顔を見ると一瞬困った仕草を見せてから、「丁度いいところに来た」と言ったので、私ははぐらかされたような気分になり、母に言おうと思っていた言葉を飲み込みました。母は私に背を向けて、地面をだらしなく這っている朝顔を手に取ると、「早く手をやれば良かったのに……」と独り言のように言い、縁の下の中に入り込んだ朝顔の蔓を引っ張って取り出しました。母の手から垂れている朝顔の蔓の先は、切れていました。

母は、「やっぱり何でもやる時期があるんやなあ」と言いました。

私は、「母さん、もう少し弁えてくれなきゃ困るよ」と心持ち口調を強くして言いました。母が握っている朝顔の蔓を見ていると、米子との結婚を許すともう相手はいないのではないかという気持ちが惹起しました。

「朝顔に手をやりたいんだけど手伝ってくれ」と母が言うので、私は脚立の一番高いところに登って軒先に釘を打ちつけ、地面に鉄パイプを置いて麻紐を結んでいき、棚を作りだしました。地面の朝顔を麻紐に巻きつけていくと、何とか棚らしきものになりました。何も存在しなかった空間に別の空間が生まれ、ずっと前からそこにあったかのような存在になっていくのだと思うと、私と米子との関係もしっかりと作り上げていかなければならない、いや行けるのだと強く意識しました。

今この瞬間にも米子が苦しみ、私も苦しんでいるのだけれども、それは何のための苦しみなのかということが問題だと、ふと思いました。私の場合、苦しみというよりは、悶々とした気持ちなのだけれども、米子の方は母との関係や私との生活がうまくいくのだろうかという心配があったに違いありません。

ふと朝顔に目をやると、つぼみの中に、微かに青い色が浮き上がっていました。

人間の悩みとは関係なく、朝顔はあたかもそれが当然のことであるかのように花を咲かせているのを見ると、私の感情などは取るに足らないようにも思えてきました。しかしそう思った途端に、絶対に米子を失いたくないという気持ちも起こって、しばらくの間、私は自分の心の揺れに弄ばれました。

母は何事もなかったかのように、蔓の草をむしり始めていました。汗が出ているらしく、盛んに手ぬぐいで額を拭いていました。

米子から手紙が来たのは、一週間ほど過ぎた頃でした。帰宅すると淡い空色の封筒がぽつんとテーブルの中央に置いてありました。宛名はきれいな楷書だったので、米子の手紙だと判りました。取り上げてみるとあまりにも軽く、断りの手紙かもしれないと思って、胃のあたりが熱くなるのを感じました。

私は一字一字、ゆっくりと眼で追っていきました。

そこに、「あなたと一緒に歩くことに決めました。もう後戻りはしません」と書いてあるのを見て、私は嬉しさとともに責任の重さを感じて厳粛な気分になりました。

いろいろな決断を求められる時に、自分のことでさえすっきりとした気分で結論を出しているわけではないのだから、ましてや、人の気持ちの奥底を見ることは決してできないにしても、私は米子の心を覗いて見たいと思う気持ちが湧いてきました。私はすぐに米子に電話をかけることにしました。

まるで私からの電話を待っていたかのように、すぐに米子が電話に出たので私は「ありがとう」とだけ言い、後は言葉になりませんでした。

結婚式に父親を呼ぶのかと、母に聞いたことがありましたが、母は、「居所も分からない人をどうやって呼ぶの」と言ったので、その話はたち切れになってしまいました。

その後私たちは結婚し、米子が我が家にきました。私が三十六、米子が二十七歳でした。

その当時も、母は事務員の仕事を続けていましたが、会社で人員整理が行われたらしく、母の仕事量はかなり増えているようでした。米子は、看護師の仕事を続けたいというので、私は米子の希望を聞いてやりました。母は、米子が来たことで家事が楽になると思っていた節があり、看護師を続けることに対して不満を持っているようでした。

米子の帰りは結構遅く、母に家事の負担が掛かっていきました。母は、折につけて「米子さんと食べ物の好みが合わない」とか、「洗濯物の畳み方が悪い」などと不満を漏らすようになりました。

米子からも、「お母さんが、一度畳んだ洗濯物をこっそりと畳みなおしている。信じられない」などと不満を聞くようになりました。

私はその頃、責任のある仕事を任されていましたから、家のごたごたを聞くのは嫌でしたが、母と米子の両方に言い分があり、嫁姑の関係がとても難しいものであるということを思い知らされたのです。

お互いから愚痴が出ていたときは、母と米子の関係はまだいい方でした。結婚して二年ほど経ってからのある夕食時のことでした。母が妙ににこにこして、「早く孫の顔を見たい」と言ったことがありました。なかなか妊娠しないことを、米子は気にし出していた時期でした。

米子は一瞬、眉を寄せ険しい表情を作りました。そして、ご飯茶碗をテーブルの上に音を立てて置きました。私は、「母さん、その内にコウノトリかペリカンが知らないけど、運んでくるから心配しなくていいよ」と冗談を言いましたが、二人とも押し黙ったままでした。

母が五十八歳になったときに、とうとう母が勤めていた会社が倒産してしまいました。当てにしていた退職金も出なくなって、「私はつくづく運のない女やなあ」などと言って、母はしばらく嘆いていました。

季節が一つ進んで、木枯らしが吹き始めたある日、米子が深刻な顔をしているので、私は「どうしたの」と聞きました。

すると米子は、「最近、お母さんがおかしいのよね」と言うのです。詳しく話を聞いてみると、ご飯を食べたすぐ後に、「米子さん、私は朝ごはん食べましたかね」と聞いたと言うのです。また、別の日には、「豆腐を油で揚げたものはなんというんだったかね。どうしても名前が思い出せなくて」とも言ったそうです。

母は、私が見ている限りでは特別変わったところがないようでしたから、その話を聞いたとき、にわかには信じられませんでした。

友人の精神科医に電話で母の様子を話すと、「それはアルツハイマー型の痴呆症だな。進行はかなり個人差があるけど、早く近くの医者に掛かった方がいいな」と気の毒そうに言いました。すぐに南山市内の総合病院で治療を始めましたが、それから半年ほど過ぎて、母は正常に生活する時間帯と、奇異な行動をする時間帯がはっきりと分かれてきました。残念なことに、後者の方が長くなっていったのでした。

ある時、私と米子の夫婦生活を母に覗かれたことがありました。私達は本当にびっくりしました。豆電球の微かな明かりの中で、母はにたにたと笑って立っていました。米子が家を出たのは、その三日後でした。米子の行方を方々探しましたが、勤めも辞めてしまったようで、その手がかりは見つかりませんでした。米子が出て行ったことが自分の責任だということを母は感じたらしく、呆けはだんだんと酷くなりました。母のまともな精神状態の時に、母が父のことをどう思っているのか聞きたいと思っていたのである日、「お父さんのことを、今どう思っているの？」と聞いてみました。母は、しばらく考えていましたが、「そりゃ、好きで結婚したんだもの、今でも好きだよ。だけど、お父さんも馬鹿だねえ。逃げた女とすぐに別れたらしいよ。あの女さえいなければ……」と言いました。母が父のことを決して許してはいないけれども、心の奥底では思いを寄せていたのかも知れないということを感じました。母は、「好きで結婚したんだから。お前が生まれてくれてな、幸せな時期があったよ」と、もう一度繰り返して、妙に明るい声で笑いました。

そして、消え入るような声で、「お前も、米子さんのことを大切にしなきゃいけないよ」と付け加えました。今から考えると、まともだった母のそれが最期の姿でした。

母の体力もだんだんと衰えていきました。母の体を拭くのは、私の役目でした。母の乳房は、つきたての鏡餅のように白く、その乳房を見ていると、私に乳を飲ませていたときの母はどんな顔をしていたのだろうと、ふと考えました。急に痩せ始めていた母の背中は、背骨の一つひとつがごつごつとしていて、何かしら骨が縮んで見えました。背骨に沿って拭きながら、その出っ張り出っ張りの一つひとつに苦労が染み付いているのだと思ったものでした。

母はその後、自分の下のものが綺麗なのか汚いのかも分からない状態となってしまいました。入院もさせましたが、手に負えないために家に戻り、しばらくしてこじらせた風邪から肺炎を併発しました。様態が急変したので、すぐに私は近くの医院に電話をしました。私が母の手を握ると、母は微かに握り返してきました。母は明らかに、何とかして生きようとしているのが見て取れました。私は眼が涕泣して嗚咽が止まらず、涙が泉のように出てきて、全てのものがゆがんで見えました。気がついてみると、握っている母の手は、少し冷たくなりかかっていたのです。

近くの医院から医者が駆けつけたときには、母はすでに冷たくなっていました。私は取り乱さないように気を引き締めましたが、ほんの一時だけで、またもや泣き崩れたのでした。

父はもちろんのこと、米子にも連絡がつかず、身内だけで母の葬儀を執り行いました。

私は、独りになりました。

それは、人の生と死について考えるには十分な空間でした。人類の長い歴史の中では、一人の人間が生きたことなど何の意味もないような気がするのですが、それでも家族がいて、人を愛し愛されて、時には憎悪の感情に支配されたとしても生きてきたという事実は消すことのできないものです。母が私を育て、次の世代に繋ごうとしてくれたことは、少なくとも私にとっては大きな意味のあることに違いないのです。母は死んだけれども、私はこうして生きています。例え、母のような死に方をせざるを得ないにしても、そこにたどり着くまでの、身の丈に合った生き方というものがあるはずだと考えたのです。そう思った途端に、ふわっと浮いたように体が楽になったのでした。

米子から突然の手紙が来たのは、母が亡くなって三ヶ月ほど経った、やけに蝉が鳴く暑い日でした。

私は分厚いその手紙を庭の見える廊下のテーブルに置いたまま、しばらく椅子に腰掛けていましたが、意を決してしっかりと糊のきいた封を開けました。蝉の鳴き声が、咽き悲しむように、じりじりと響いてきました。私は不思議なほど落ちついた気持ちで、手紙を読み出したのでした。

（了）

いまい・たかし　昭和30年、岐阜県郡上郡（現下呂市）萩原町に生まれる。農林水産省に勤務するかたわら、30歳ぐらいから小説、ルポなどを書き始める。文芸同人誌「火夢」主宰。短編で、「岐阜市文芸祭賞」受賞。平成12年に水稲新品種「龍の瞳」を発見して育成、19、20年と、お米の食味コンクールで日本一に輝く。現在は、（株）龍の瞳の代表を務めながら、森の再生などを夢見る。

文芸プラザ